



～ Nurse-care Report ～

Vol. 5

「子どもと高齢者」

株式会社ナースケア東北企画室

～乳幼児期の発達心理学における関わり方と多世代の交流～

どんな子どもに育てたいですか？

様々なアンケートを見てみると「思いやりのある子」が上位に挙がっています。

思いやり 思い遣り とは？

その人の身になって考えること。察して気遣うこと。

漢字で表す通り、相手の気持ちを思い、気遣うこと という意味のようです。

この思いやりの気持ちの基盤となるのが「共感」となるのです。

発達心理学における共感とは…

「他者の感情的な状態の理解から発生する、他者が経験している感情と類似した感情を体験すること」とされています。

乳幼児期の共感的コミュニケーション

- ・ 生後まもない頃 他の赤ちゃんの泣き声に反応して泣いてしまう
 “原初的な共感反応” (Hoffman)
- ・ 1歳頃～ 泣く子を慰めるためにおもちゃを持ってくる “共感的心配”

成長するに従い、自己と他者を区別できるようになっていく

共感性の発達を促す条件

1. 基本的信頼

笑えば喜ぶ、泣けば来てくれる 母親が反応、共感的に応答



愛着・情緒的な結び付き形成



感情的な要求満たされる



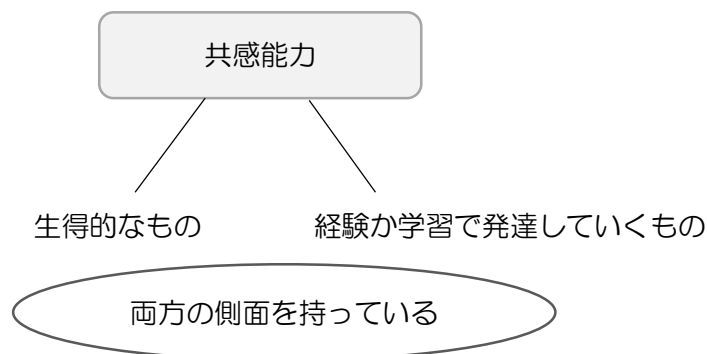
他者の苦しみに対して、感情的に、共感的に応答する能力が形成される

2. 親の共感性

「モデリング」 共感的な親の行動が子どもにとってのモデルとなり、模倣することによって、共感的な行動を身につけていく。

親子関係に限ったことではなく、子どもが間接的に関わることによって共感性の高い子に育つと言われている。

3. 養育態度



① 多くの感情を経験させる

「子ども自身がいろいろなタイプおよび強さの感情を経験していくような親の励ましや関わり方が、子どもの共感能力を増大させる」(Hoffman)

② 誘導的なしつけ — 他者の気持ち・感じ方に注意を向けさせる



「役割取得能力」に発展させていくことに繋がる



相手の立場に立って、相手のものの見方・考え方・感じ方を推測してみる

③ 友人との社会経験

友人との豊富な社会的体験



仲間との多様な感情を経験



他者が自分とは異なった感情を持っているという「気づき」が生まれる

一方、

友達との共有体験が少ない



相手の気持ちを考えることができない

感情に鈍感

自分は自分
人は人

“他者”という存在に目を向け、自分自身とは異なった“感情”を持っているという気づきを生むために、乳幼児期の母親との関係性から始まり

様々な経験を仲間と共有することを通し

自分自身の感情を豊かにすることが、

ひとを思いやれる基礎 [共感] に繋がる

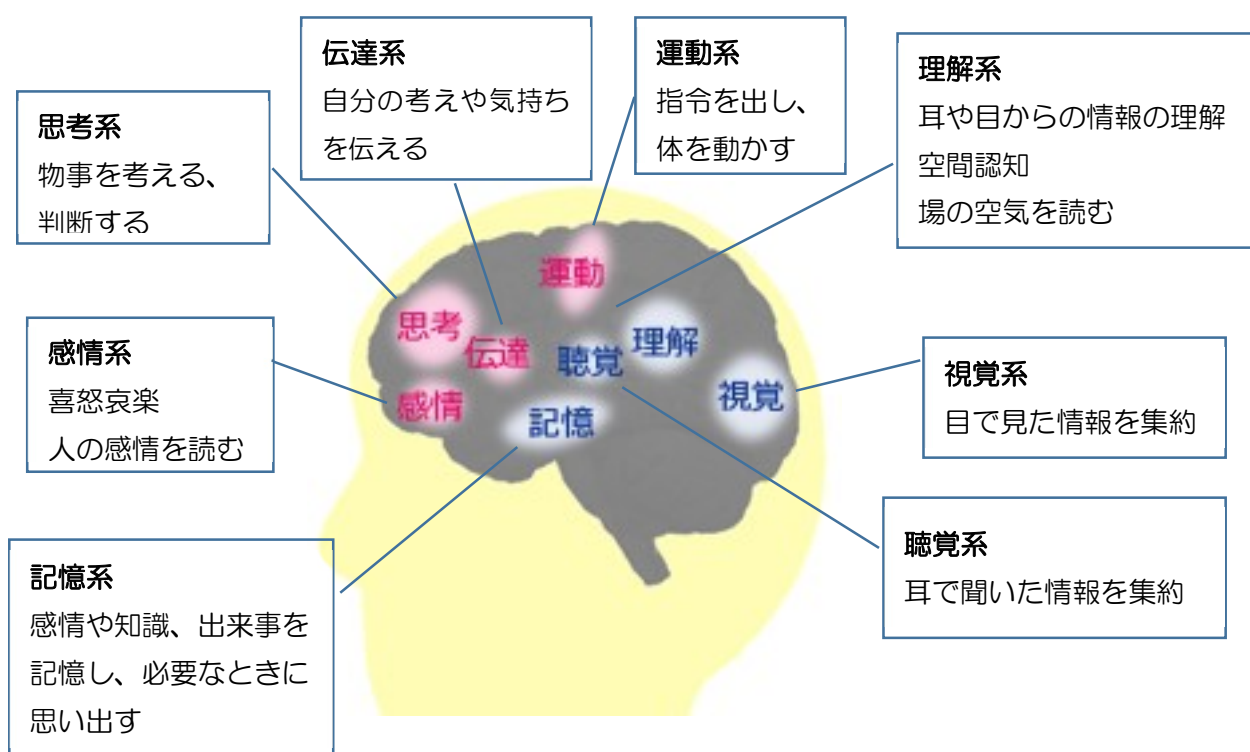
乳幼児期の育ちと教育の重要性 (仙台市幼児教育の指針より抜粋)

- ・乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う大変重要な時期です。「自分は愛されている、大切にされている」と実感できることが、子どもに安心感と自信を与え、健やかに成長する原動力となります。
- ・0～2歳までは特定の大人との信頼関係と愛着関係のもとに、子どもが安心して周囲の人や物に興味を持ち、直接関わっていきこうとする意欲を育むことが重要です。ありのままの自分を受け入れてもらうことで、自己肯定感を獲得することが大切です。

発達過程から人とのかかわり、そこから生まれる感情や関係性をみてきました。
では、それらを発達させる・成長させる脳について説明したいと思います。

4. 脳番地

脳は約 1000 億個の神経細胞からできています。その神経細胞は同じ種類のもものが寄り集まり、約 120 の集団をつくります。それらは機能ごとに 8 つのグループに分類されます。



脳が成長するには…

様々な経験を通し、考え、理解し、記憶したりすることで脳は成長
脳は成長するとき、番地ごとに育つ

よく使う脳番地は成長
あまり使わない脳番地は未熟に

普段使わない脳番地をいざ使おうとすると、成長が未熟なため
うまく働かない

怒りや焦りといった「マイナスの感情」が生まれる

何歳になっても脳は成長できる
脳の成長を止めるのは加齢ではなく、刺激のない生活

子どもたちは保育園で様々な活動を通し、五感を活用し、経験を積み成長していきます。

しかし、高齢者はどうでしょう？

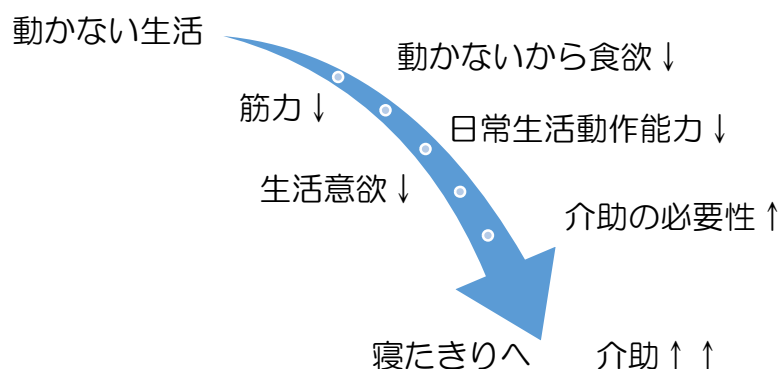
毎日ほぼ決まった時間に、あるいは起きたい時に起きて、
用意された食事を摂り…

もちろん活動的に過ごされている高齢者もたくさんいらっしゃいます。

また、個人個人の生活リズムがあるため、ゆっくり自分のペースで過ごすことを否定することでもありません。

ただ、施設という環境に入ってしまうと中々新しい刺激を受けることが少なくなってしまうのです。

それにより身体的・精神的・認知的機能の低下を加速させている要因となってしまうのです。



5. 子どもと高齢者のかかわり

「どんな子どもに育てたいですか？」

「思いやりのある子に育てたい」 そう答えた親御さんは今までの経験の中で、思いやりが大切だと感じているからこそ、返答だと思います。保育園を利用している親御さんの多くは共働き家庭であり、養育・教育の現場が担う役割は大きなウエイトを占めていることが推測されます。成長するにつれ徐々に社会に目を向けること・社会とのつながりは色濃いものへと発展していきます。ひとはひとの中で生活しているからこそ、人のことを敬う心が必要であり、思いやりの心が人間関係を良好なものにすると実感していると言えます。しかしながら核家族化、地域のつながりが希薄と言われる昨今、社会性をはぐくむ機会や幅広い世代の方々と交流する機会は少ないと思います。そのような中、「幼老複合施設」がふえつつあります。地域で子どもたちを育てようと高齢者施設の中に保育園や学童保育等が併設されています。高齢者が子どもに関わる上で、自身も子育てを経験しているからこそ分かる大変さ、子どものかわいさ・素直さ・無邪気さは、高齢者にとって大きな武器になりますし、乳幼児期の子どもたちにとっては大きな愛情として受け取ることが出来る機会となるでしょう。感受性が豊かな時期、親が想像しているよりも大きなことを子どもたちは受け取ってくれるでしょう。“こころ”という発達度合いが計り知れない、他者が押し量ることが難しいものを、みれる・考える・変えられるのは“こころ”で向き合うことが大切なのではないでしょうか。

また、親御さん世代は子育てと、少し先の話になるのかもしれませんが、親の介護という課題（ダブルケア）に直面する方も少なくないと思います。自分が親になって気づく、子育ての大変さ、親のありがたみ・大切さ…。今までの愛情を今度は自分が返していく番がくるのです。親の衰えた姿を見たい子どもはいないと思います。いつまでも元気で、いきいきと暮らしてほしいと願う方が大半ではないでしょうか。

小さい頃から、同年代と交流を持つことで自分自身の心を豊かにし、時にはおじいちゃん・おばあちゃん世代とふれあい、見返りを求めない大きな愛情をもらい人間性を養っていくことも、今後の社会情勢も踏まえた取り組みの一要素となるのではないのでしょうか？